



『第34回全国豊かな海づくり大会（放流・歓迎行事）』
（画像提供：奈良県）

CONTENTS

第34回全国豊かな海づくり大会について	2
	増殖推進部 栽培養殖課
大西洋まぐろ類保存国際委員会（ICCAT）の年次会合の結果について	5
	資源管理部 国際課
南極海における新たな鯨類調査計画案の概要について	6
	資源管理部 国際課
回遊魚	7
	瀬戸内海漁業調整事務所長 取香諭司
平成26年11月分のプレスリリース	8

第34回全国豊かな海づくり大会について

増殖推進部 栽培養殖課

去る11月16日(日)、第34回全国豊かな海づくり大会～やまと～が、「ゆたかなる 森がはぐくむ 川と海」をテーマに、豊かな海づくり大会推進委員会と全国豊かな海づくり大会奈良県実行委員会の共催のもと、農林水産省、環境省の後援により奈良県大淀町文化会館あらかしホール(式典行事)及び川上村おおたき龍神湖畔(放流・歓迎行事)で開催されました。

全国豊かな海づくり大会は、水産資源の維持培養と海や湖沼・河川の環境保全に対する意識の高揚を図るとともに、水産業に対する認識を深めていただくための国民的行事として、昭和56年度から毎年開催されており、天皇皇后両陛下には、皇太子・同妃殿下の時代から御臨席いただいております。

式典行事は、天皇皇后両陛下御臨席のもと、大会旗入場に引き続き、大植 正奈良県漁業協同組合連合会代表理事会長による開会のことばで始まり、主催者を代表して大会会長である伊吹文明衆議院議長が、平成23年の紀伊半島大水害の被災者に対してのお悔やみ、お見舞いを述べるとともに、「奈良県は、歴史が息づく日本のルーツとも言うべき土地である。」「海に面していない奈良県での開催意義は、豊かな海を大事にするには豊かな山と森を大切にすることにある。」などと冒頭の挨拶をされました。

続いて、荒井正吾奈良県知事が、「初代天皇の神武天皇は、日向の高千穂からこの大和を目指され、その道中、瀬戸内海、紀伊水道、太平洋の海を利用して、多くの勢力をお運びになられ、橿原の地でご即位されました。現在まで連綿と125代を数えます天皇の御代のうち初代から第49代までは、この奈良を中心にご在位いただきました。その中で、飛鳥に宮処があった時代のスーパーレディーであらせられた第41代持統天皇は、日本で最初の本格的な都「藤原宮」を造営されましたが、今大会で放流行事の行われます吉野川沿いにある宮滝という場所に幾度となくご行幸されています。このようにご皇室と海とにゆかりのある奈良の地で豊かな海づくり大会を開催させていただくことになり、深く感謝しているところでございます。海の幸は川の恵み、山の恵みと考え、山、川、海を水が循環している中で森や山が大きな役割を担っていることを認識し、感謝する大会として実行させていただきたい。」との歓迎のことばを述べられました。

次に、功績者団体等への表彰式が行われ、伊吹文明大会会長、西川公也農林水産大臣、望月義夫環境大臣、本川一善水産庁長官、荒井正吾奈良県知事がそれぞれ功績があった団体等の受賞者に表彰状を授与されました。

続いて、作文コンクールで大会会長賞を受賞した、天川村立洞川中学校3年更谷 昂さんが、「アマゴはどんぐりから生まれる？」を発表しました。

「僕が住んでいる奈良県天川村は、熊野川水系の源流部に位置し、清流が流れる自然豊かな村です。清流には、アマゴ、イワナ、アユなどの渓流魚がたわむれ、毎年多くの釣り客でにぎわっています。ある日父は、僕に“アマゴはどんぐりから生まれる!”と言いました。この言葉は、父が知人から聞いたそうですが、僕には、その言葉の意味が全く分かりませんでした。父は、僕にその言葉の意味を考えるきっかけとなる始まりの一滴ツアーを企画してくれました。」と、はきはきした口調で朗読が始まりました。

朗読内容は、自宅前の川に沿って登山道から家族で出かけた「一滴ツアー」の様子を述べています。

森の中は、「奈良県森林環境税」によって間伐作業が行われ、太陽の光が入り込み、動植物の生息環境が維持され、生態系の保全や災害防止等の多面的機能の発揮につながっていることから、巨木の根が川岸を覆い、水にも流されることなく、何年もこの地に根付いている巨木の力強さに感動した様子や、途中で父が栃の実を、母が大量のどんぐりの実を拾ってきて、この時、この生徒が父から教わったことは、アマゴとどんぐりは食物連鎖の中で密接に結びついていて、そのたとえば「アマゴはどんぐりから生まれる」ということでした。



その後、川に沿って登って行き、だんだん川幅が狭くなり、またげるくらいの川幅となり、やがて川の流れが見えなくなる地点にさしかかり、一目散に走って行ったところが、そこがまさに川の源流となる「始まりの一滴」であり、この時の感動と感想を述べた力強い朗読の発表が終わると、会場からは大きな拍手が起こりました。

次に、両陛下より放流を行う市町の小中学生に対し「海産アユ」と「フナ」のお手渡しが行われました。

続いて、やまと海づくりメッセージの発信として、女優「檀れい」さんと「せんとかん」のナビゲーターにより林業従事者夫妻や奈良県南部地域の小学生による力強いメッセージの発表を行うと、会場からは大きな拍手とともに記者席からはフラッシュが相次ぎました。

式典行事の最後として、岸 宏大会推進委員会会長の「今日まで 34 回にわたり開催されてきた「全国豊かな海づくり大会」の意義を、ここ奈良県において改めて確認し、「ゆたかなる 森がはぐくむ 川と海」を合言葉に、さらなる環境・生態系の保全に努めながら、森、川、海を守り育ててゆくことをここに決議する」と宣言した大会決議が満場の拍手で採択され、その後、荒井正吾奈良県知事から大会旗が次期開催県の石井隆一富山県知事へと引き継がれました。

式典終了後は、会場を川上村おおたき龍神湖畔に移して、放流・歓迎行事が行われました。奈良県立五條高等学校による吹奏楽での歓迎演奏の中、天皇皇后両陛下をお迎えすると、両陛下は満面の笑顔でお応えになっておられました。

続いて、法螺貝や和太鼓演奏の中、奈良県南部地域の小学生・中学生等によるカヌーでの水上歓迎パレードが行われ、30 隻以上の色とりどりのカヌーが静かな湖面をすべるように弧を描き、周りの山の緑と一部紅葉している風景とのコントラストは、神話のふるさとを想像させるにふさわしい光景で両陛下も終始笑顔で手を振られお応えになりました。

放流魚は、最初に両陛下がアマゴの稚魚を御放流、2 回目にはダム湖産の親アユを御放流され、その行方を目で追っておられました。併せて招待者による放流も同時に行われました。最後に司会者の終了のアナウンスで放流・歓迎行事の幕を閉じ、吹奏楽の演奏と拍手で天皇皇后両陛下をお見送りすると、両陛下は終始笑顔でお応えになっておられました。

・・・そして「おたき龍神湖」は再び静かな湖面へと戻っていきました。

今回の奈良大会は、第 30 回の岐阜大会以来、内陸県での開催は 4 年ぶりとなりますが、式典会場である大淀町から、約 20^{キロ}以上離れた「おたき龍神湖」までは川沿いにどんどん上流に入って行くこととなりましたが、それでも途中の沿道には、両陛下に多くの地元の方が日の丸を振って歓迎しておりました。

奈良県の内水面漁業は、全国に比べ漁獲量は少ないものの、アユ、フナ、アマゴ、コイなど 80 トン近く漁獲されており、県の魚として全国金魚すくい選手権大会で有名な「キンギョ」や「アユ」、「アマゴ」が指定されております。近年は、きれいな川を復活し、漁業資源を守り育てる取り組みとして、子ども達も参加して種苗放流を行っており、このような活動が今後各地に広がって、豊かな海づくりの輪がますます広がっていくことを願っております。

第 35 回大会は、平成 27 年秋に富山県と豊かな海づくり大会推進委員会の共催により「海と森 つながる未来 命の輪」の大会テーマのもと、富山県内で開催されることとなっております。(大会キャラクター“きときと君”)

第 34 回全国豊かな海づくり大会 大会決議

我が国の森、川、海は、その豊かな自然の恵みにより国民の生活を支え、多様で優れた食文化をもたらしてきた。

ここ奈良県は、紀伊半島の中央に位置し、四季折々に変化を見せる広大な自然と豊富な水資源を有している。

森林に蓄えられた水は、大阪湾に注ぐ大和川をはじめ、紀伊水道につながる吉野川など、四水系の河川の清流となり、アユやアマゴ等の内水面漁業が営まれ、地域産業の発展に重要な役割を担ってきた。

私たちは、かけがえのないこの自然が、生活と文化の基盤であることを再認識し、感謝するとともに、我が国の恵まれた環境と水産資源を守り、誇りをもって将来に引き継ぐ重要な責務がある。

今日まで 34 回にわたり開催されてきた「全国豊かな海づくり大会」の意義を、ここ奈良県において改めて確認し、「ゆたかなる 森がはぐくむ 川と海」を合言葉に、さらなる環境・生態系の保全に努めながら、森、川、海を守り育ててゆくことをここに決議する。

平成 26 年 11 月 16 日
第 34 回全国豊かな海づくり大会

第34回全国豊かな海づくり大会 受賞者一覧

【功績団体】

< 栽培漁業部門 >

大会会長賞	富山県	富山漁業協同組合
農林水産大臣賞	奈良県	天川村漁業協同組合
環境大臣賞	滋賀県	公益財団法人 滋賀県水産振興協会
水産庁長官賞	大阪府	大阪府漁業協同組合連合会資源管理委員会 サワラ流網漁業管理部会

< 資源管理型漁業部門 >

大会会長賞	青森県	小川原湖漁業協同組合
農林水産大臣賞	青森県	青森県小型いか釣漁業協議会
環境大臣賞	茨城県	久慈川漁業協同組合
水産庁長官賞	鳥取県	鳥取県資源管理実践協議会

< 漁場・環境保全部門 >

大会会長賞	奈良県	五條市立阿太小学校
農林水産大臣賞	大分県	特定非営利活動法人 水辺に遊ぶ会
環境大臣賞	富山県	魚津市漁場環境保全会
水産庁長官賞	福島県	福岡市漁業協同組合

【作文コンクール】

< 小学校低学年の部 >

大会会長賞	堀口 涼愛	奈良県天川村立天川小学校 2年
農林水産大臣賞	森野 花音	奈良県川上村立川上小学校 2年
環境大臣賞	上原 大和	奈良県大淀町立大淀桜ヶ丘小学校 3年
水産庁長官賞	山田ちずほ	奈良県天川村立天川小学校 3年
奈良県知事賞	市川 慈人	奈良県河合町立河合第三小学校 3年

< 小学校高学年の部 >

大会会長賞	梅本 麻瑚	奈良県宇陀市立室生西小学校 5年
農林水産大臣賞	椎野 真心	奈良県生駒市立あすか野小学校 6年
環境大臣賞	奥垣知那美	奈良県奈良市立伏見小学校 5年
水産庁長官賞	梅田 夏海	奈良県五條市立阿太小学校 4年
奈良県知事賞	勝村 文音	奈良県宇陀市立室生西小学校 5年

< 中学生の部 >

大会会長賞	更谷 昂	奈良県天川村立洞川中学校 3年
農林水産大臣賞	荒木 陸	奈良県大淀町立大淀中学校 2年
環境大臣賞	水野 友晴	奈良県奈良県立青翔中学校 1年
水産庁長官賞	中東 優太	奈良県天理市立福住中学校 3年
奈良県知事賞	小西 一葉	奈良県斑鳩町立斑鳩南中学校 3年

< 高校生の部 >

大会会長賞	更谷ほたる	奈良県奈良県立高田高等学校 2年
農林水産大臣賞	東 由真	奈良県奈良県立十津川高等学校 3年
環境大臣賞	平井 寛史	奈良県奈良県立吉野高等学校 3年
水産庁長官賞	鳴戸 千優	奈良県奈良県立五條高等学校 2年
奈良県知事賞	東 佳菜	奈良県奈良県立十津川高等学校 3年



大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT) の年次会合の結果 について

資源管理部 国際課

はじめに

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT) は、大西洋における高度回遊性魚種 (マグロ、カツオ及びカジキ類) の保存管理を目的とする地域漁業管理機関であり、年次会合を開催して保存管理措置を決定しています。加盟国・地域は、日本、米国、カナダ、ブラジル、中国、南アフリカ、EU 等の 49 加盟国・地域です。

2014 年 11 月 10 日から 17 日まで、ジェノバ (イタリア) において 2014 年 ICCAT 年次会合が開催されたところ、我が国からは、太田水産庁漁場資源課長 (政府代表)、宮原農林水産省顧問をはじめ、水産庁、外務省、経済産業省、独立行政法人水産総合研究センター及び漁業関係団体の関係者が出席しました。なお日本は、昨年 11 月の年次会合終了後から、大西洋クロマグロや北ビンナガの保存管理措置を議論する小委員会 (パネル 2) の議長を務めています。

今年の本会合の主な結果は次のとおりです。

I. 大西洋クロマグロの保存管理措置

大西洋クロマグロについては、近年、漁獲枠の削減、漁獲証明制度の導入など、保存管理措置が強化されてきました。このような取組みの結果として資源の回復が確認されており、2012 年の年次会合では、微増ながらも 10 年ぶりに東資源の漁獲可能量 (TAC: Total Allowable Catch) を増加することで合意しました。2013 年の年次会合では、2014 年の資源評価を控え TAC を現状維持とすべきとの慎重な決定になったものの、漁場では引き続き資源の回復傾向が確認されていました。

そして、今年 10 月の科学委員会 (SCRS) において、改めて大西洋クロマグロの資源評価が行われた結果、東資源については、TAC を約 23,000 トンまで増やしても資源の回復に悪影響を与えない、西資源については、TAC を 2,250 トンまで増やしても資源は減少しない、という管理勧告が出されました。

これを受け今回の年次会合では、大西洋クロマグロの TAC 及び各国・地域の割当量が議論されました。東資源については、最大の割当量を有する EU から 3 年間で 20% ずつ TAC を増加させ、最終的に約 23,000 トンまで増加させるという提案が出され、最終的なレベルについてはほとんど異論が出なかったものの、その増加方法や各国への割当方法について様々な要望が出され、特に割当方法については激しい議論が行われました。交渉の結果、過去に多くの漁獲実績を持つアルジェリア、トルコ等にも少量の追加枠が設けられ、これを除いた総枠が各国・地域が現在持つ割当比率で配分されることとなり、我が国も、従来通りの割当比率を確保しました。

具体的な漁獲枠は以下の通りです。

(1) 東大西洋

2015 年～2017 年の 3 年間の TAC について、以下のように増加することが合意されました。

2014 年：13,400 トン (現行)
 2015 年：16,142 トン (対前年 2,742 トン増)
 2016 年：19,296 トン (対前年 3,154 トン増)
 2017 年：23,155 トン (対前年 3,859 トン増)

※ただし、SCRS からの勧告を踏まえて、毎年の TAC は再検討の可能性があります。

また、日本の割当量は以下のように決定しました。

2014 年：1,139.55 トン (現行)
 2015 年：1,345.44 トン (対前年 205.89 トン増)
 2016 年：1,608.21 トン (対前年 262.77 トン増)
 2017 年：1,930.88 トン (対前年 322.67 トン増)

(2) 西大西洋

現行 1,750 トン (うち日本の割当量は 301.64 トン) である TAC を、2015 年及び 2016 年の 2 年間、2,000 トン (うち日本の割当量は 345.74 トン) に増加することが合意されました。

II. その他の保存管理措置

(1) 熱帯まぐろ

カツオについて、SCRS より、人工集魚装置 (FADs) を用いた操業の増加が資源に影響を与えている可能性があることが報告されたことから、他の熱帯まぐろ (メバチ、キハダ) とともに、FADs を用いた操業に禁漁期が設けられることとなりました。また、資源評価に用いる情報を収集するため、今後タグを用いた生物学的情報の収集を行うこととなりました。

(2) クロマグロ漁獲証明制度の電子化

現在、紙で行われている大西洋クロマグロの漁獲証明制度を電子化するシステムについては、今年10月に関係国間での国際的なテストを行った結果、いくつかの技術的問題が残っており2015年3月に予定されている完全実施は困難とされたことから、完全実施は延期し、導入の準備が整った国から自主的に実施していくこととなりました。

Ⅲ. その他の事項

- (1) 次回の年次会合は、2015年11月に地中海のマルタ共和国において開催される予定です。

おわりに

大西洋クロマグロのTACの増加は、しっかりとした資源管理に取り組みば資源は必ず回復するというを示しています。我が国としては、世界有数のマグロの漁業国・消費国として、資源の持続的利用のため、引き続きリーダーシップを発揮して対応していきます。



会議場の風景

南極海における新たな鯨類調査計画案の概要について

資源管理部 国際課

1. 調査の名称

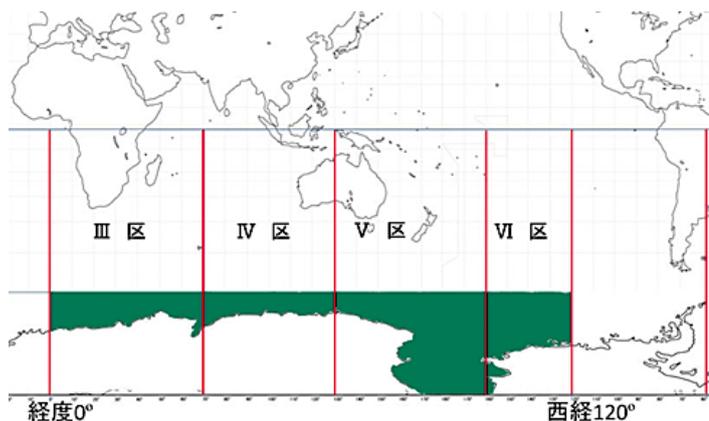
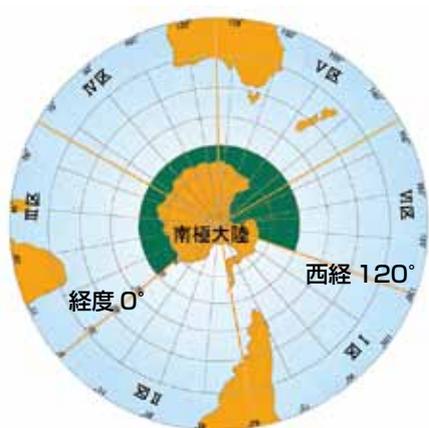
新南極海鯨類科学調査 NEWREP-A (ニューレップ・エイ)
New Scientific Whale Research Program in the Antarctic Ocean

2. 調査目的

- (1) RMP (改訂管理方式) を適用したクロミンククジラの捕獲枠算出のための生物学的及び生態学的情報の高精度化
(2) 生態系モデルの構築を通じた南極海生態系の構造及び動態の研究

3. 調査海域

南緯60度以南、経度0度～西経120度 (国際捕鯨委員会 (IWC) の管理海区 III 区～VI 区)



調査海域

4. 調査期間

12年間
(2015/16年度～2026/27年度、6年後に中間評価を実施します。)

5. 調査の方法・内容

- (1) 捕獲調査
ア 対象鯨種 クロミンククジラ

イ 捕獲頭数 333 頭

- (ア) RMPの適用(調査目的の(1))において重要な要素となる「性成熟年齢」の算出に必要な年齢情報は、現時点においては非致命的調査によって取得することが不可能であり、致命的調査が必要です。
- (イ) 本調査計画案では、性成熟年齢について、十分な精度をもって推定するために必要となる捕獲頭数に限定しています。
- (ウ) なお、当該捕獲頭数から入手できるデータ等を最大限活用し、より良い生態系モデルを検討します(調査目的の(2))。

(2) 非致命的調査

資源量推定のための目視調査、バイオプシー・サンプル(皮膚標本)の採取、海洋観測等、これまでの南極海鯨類捕獲調査で実施してきた非致命的調査を継続するとともに、以下の非致命的調査手法の実行可能性・有用性を検証します。

- ①南極海(特に沖合域)におけるクロミンククジラからのバイオプシー・サンプル採取の実行可能性について検証。
- ②バイオプシー・サンプルから抽出したDNAの分析による年齢推定手法(耳垢栓の分析の代替手法)の実行可能性・有用性について検証。
- ③バイオプシー・サンプルから抽出したビタミンAや脂肪酸の分析による鯨類の栄養状態把握手法(脂皮厚測定等の代替手法)の実行可能性・有用性について検証。
- ④クロミンククジラへの衛星標識(繁殖海域の特定)やデータロガー(摂餌行動の調査)の装着を試行的に実施。

(3) 餌生物資源量調査

計量魚群探知機を活用した簡易なオキアミ資源量調査を実施します。

6. 調査実施主体及び使用調査船

(一財)日本鯨類研究所、母船1隻、複数の採集船・目視船

7. 緊急時の対応策

反捕鯨団体による妨害活動、悪天候等により、調査活動の中断等を余儀なくされた場合において、調査結果への悪影響を科学的な観点から可能な限り小さくするため、現場での対応、調査計画の変更・調整、取得データの分析手法等について規定しています。

8. 外国人科学者の参加及び他の調査機関等との連携

外国人科学者の参加を歓迎するとともに、CCAMLR、国際水産資源研究所、国立極地研究所等の外部機関や関係する調査プログラムとの連携を強化します。

9. その他

- (1) 本計画案は、国際司法裁判所(ICJ)「南極における捕鯨」訴訟(豪州対日本、ニュージーランド訴訟参加)の判決の指摘を考慮しています。日本は、外部からの科学的なコメントを歓迎するとともに、本計画案は、科学的なコメントを踏まえ、必要に応じて今後も修正します。
- (2) 南極海における新たな鯨類調査計画案(英語)の全文は、水産庁ホームページ「捕鯨の部屋」
<http://www.jfa.maff.go.jp/j/whale/index.html>
でご覧になれます。

回遊魚

回遊魚

今年も残すところ僅かとなりました。例年、大晦日は近場の露天風呂につかり、夜空を眺めながら、その年の振り返りと翌年の目標(減量したい!)に考えを巡らすのですが、結局、「去年の大晦日も同じことを考えていたな~」から先に進まないという、毎年同じパターンを繰り返しています。さながら本コラムのタイトルである「回遊魚」のごとく、1年経って同じところ(露天の湯船)に戻ってきた、といったところでしょうか。

ところで、先日、職場の同僚に、地元神戸のとある飲み屋に連れて行ってもらいました。その店は年配のご夫婦が切り盛りしているお店でしたが、話を聞くと、かつて神戸の事務所の職員で今は東京など遠くで働かれている方々でも数名が時々訪れるとのことでした。現役の方から退職された方まで様々な方々のようですが、これら方々は「回遊魚」のごとく、きっと何らかの居心地のよさに惹かれてこのお店に回遊してくるのでしょうか。

そういえば、クロマグロ、ウナギ、トラフグなど今年関心を集めた「回遊魚」達にも、彼らにとっての居心地よさを作り出すことで、より多くのもの達に未永く回遊してきてもらいたいものです。

年が明ければ、これまた「回遊魚」のごとく七福神を回ってこようと思っています。これも私にとって新年恒例の行事ですが、ここ神戸にも手軽に回れる七福神がありました。もう若くないので暖かくして出かけようと思っています。皆様も風邪などひかぬよう、健康でよいお年をお迎え下さい。



瀬戸内海漁業
調整事務所長
とりか さとし
取香 諭司

発表年月日	発表事項名	担当課
H26.11.4	「南極の海洋生物資源の保存に関する委員会 (CCAMLR) 第 33 回年次会合」の結果について	国際課
H26.11.4	「日・ミクロネシア漁業協議」の結果について	国際課
H26.11.7	「水産政策審議会第 52 回企画部会」の開催及び一般傍聴について	企画課 栽培養殖課
H26.11.7	「水門・陸閘等の安全かつ適切な管理運用検討委員会」の中間とりまとめの公表について	防災漁村課
H26.11.7	「大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT) 第 19 回特別会合 (年次会合)」の開催について	国際課
H26.11.10	「平成 26 年度磯焼け対策全国協議会」の開催及び一般傍聴について	整備課
H26.11.10	トラフグ資源管理検討会議の開催及び一般傍聴について	管理課
H26.11.12	「第 21 回太平洋広域漁業調整委員会」の開催及び一般傍聴について	管理課
H26.11.14	西川農林水産大臣の国内出張について	栽培養殖課
H26.11.14	うなぎ養殖業における平成 27 年漁期ニホンウナギ稚魚の池入れ数量の制限に係る数量配分ガイドラインの制定について	栽培養殖課
H26.11.17	「日・キリバス漁業協議」の開催について	国際課
H26.11.18	「大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT) 第 19 回特別会合 (年次会合)」の結果について	国際課
H26.11.18	南極海における新たな鯨類調査計画案の提出について	国際課
H26.11.18	「水産政策審議会第 68 回資源管理分科会」の開催及び一般傍聴について	漁政課
H26.11.25	「日・キリバス漁業協議」の結果について	国際課
H26.11.26	第 2 回「沿岸部 (海岸) における気候変動の影響及び適応の方向性検討委員会」の開催及び一般傍聴について	防災漁村課
H26.11.26	平成 26 年度日本海さば類・マアジ・マイワシ・ブリ長期漁況予報	漁場資源課
H26.11.28	「中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC) 第 11 回年次会合」の開催について	国際課
H26.11.28	「日ロ漁業委員会第 31 回会議」の開催について	国際課
H26.11.28	「第 11 回南東大西洋漁業機関 (SEAFO) 年次会合」の開催について	国際課

編集後記 窓辺のカーテン

2014年農林水産研究成果10大トピックスの一つに、独立行政法人水産総合研究センターの「ニホンウナギ仔魚飼育 大型水槽で成功」が選定されました。従来のように手作業で1尾ずつ飼育管理を行うことなく、まとまった数の仔魚を飼育できるようになったことで、シラスウナギの量産技術の開発に期待が膨らんでいます。

「漁政の窓」では、皆様に水産庁施策についてわかりやすくお伝えできるよう努めていきますので、どうぞよろしく願いいたします。

ご意見やご質問がありましたら、以下にお願いいたします。

水産庁施策情報誌 **漁政の窓**

編集・発行 水産庁漁政部漁政課広報班

〒100-8907 東京都千代田区霞が関1-2-1 合同庁舎1号館8階

代表 03-3502-8111 (内線6505)

URL <http://www.jfa.maff.go.jp/>

ご意見 ご質問はこちらへ ➡ URL <http://www.maff.go.jp/j/apply/recp/index.html>